

38 『高等鍼灸学講義』の「鍼治学・灸治学」について

宮川 隆弘

日本鍼灸研究会

繆召予翻訳、張俊義校訂の『高等鍼灸学講義』は、中国・民国20年～21年(1931～1932)に浙江省寧波の東方鍼灸書局などから分冊の鉛印本で初刊された鍼灸全書である。本書は、日本の昭和初期に刊行された牛島鉄弥編集の『高等鍼灸学講義録』(神戸延命山鍼灸専門学院。1～12号。大和綴、謄写版)から必要な内容を編集翻訳したもので、解剖学、消毒学・診断学、生理学などの西洋医学に関連した冊子とともに、「鍼治学・灸治学」が収められている。なお1930年代の寧波や上海では、東方鍼灸書局などによる、菅沼周桂著『鍼灸則』、杉山和一著『選鍼三要集』、玉森貞助著『人体写真十四経絡図譜』などの日本の鍼灸書の刊行が盛んであった。

原著『高等鍼灸学講義録』の編者・牛島鉄弥は、長崎市に生まれ、長崎医学校に学んでいた頃、瘰癧症を患い、三か月治療を受けるも改善しなかったが、灸治により全治した。よって西洋医学を断念し、明治21年に上京して慶応義塾に学びながら、灸を業とする延命山という寺院に下宿していた。寺院所蔵の古書によって研究を重ね、24歳で免許を取得、以後、全国の灸療を視察、研究し、大正3年に神戸に足をとどめ、延命山鍼灸専門学院長として名声を博した。

「鍼治学・灸治学」のうち、「鍼治学」の第一章では鍼灸学の意義、日本の奈良時代から明治時代の鍼灸に関する代表的な人物、書籍などが詳しく紹介されている。第二章では、最初に鍼灸の定義、鍼の種類(九鍼、日本の歴代流派による鍼尖及び鍼の種類)、刺鍼方法として捻鍼法、打鍼法、管鍼法(片手挿管法、両手挿管法)、押手、刺鍼方向、基本の手技十種類が説明されている。特に管鍼法の解説は図解入りで詳細である。次に鍼の生理作用、刺鍼の練習、禁忌症、折鍼の処置などが西洋医学的に詳述され、補瀉迎髄にも言及している。さらに皮膚の鋭敏さ、常則刺入法(弾入を杉山真伝流の「浮水六法」という手技名で解説)、鍼の響き、抜鍼、刺鍼上の注意、押手16法、切皮術としての浮水六法(軽緩・重緩、軽数・重数、軽遅・重遅)の具体的な方法(○の数で鍼柄を叩く回数を表記)、基本手技(単刺、旋燃、廻旋、振震、間歇、置鍼、雀啄)、弾入後の手技としての「初専」「次専」の方法を説明している。これに続いて「百法鍼術」と題して5種の手技の説明があるが、残余は別冊に譲るとしている(この別冊とは、延命山鍼灸専門学院の講師であった上谷露月所蔵本に基づき、昭和4年〔1929〕に延命山鍼灸専門学院から謄写刊行された『杉山真伝流百法鍼術』〔以下、『百法鍼術』〕のことと思われる。この『百法鍼術』は、中国でも民国21年〔1932年〕に翻訳刊行されたが、前述の「初専」「次専」の手技など100以上の手技について説明がみられるものの、前述の押手16法などは採録されていない。杉山真伝流の「百法鍼術」を理解する上では、『高等鍼灸学講義』の「鍼治学」と『百法鍼術』が必要であるが、『百法鍼術』は以降中国では伝わらなかった。)。これに続き、順気の法(慢性疾患に対する刺鍼点と杉山真伝流手技の関係を説明した表)、診療の心得、刺激量、深淺、補瀉迎髄、前後・左右・巨刺・繆刺、小兒鍼についての西洋医学的効能、無分流の手技、小兒鍼の方法についての説明がみられる。

「灸治学」は灸の西洋医学的効能が主体で、基本的な方法について言及がみられる。

『高等鍼灸学講義』は、民国時代に翻訳された日本の鍼灸書の中でも極めて水準の高い鍼灸入門書であり、中国に管鍼法を詳しく伝えた唯一の鍼灸書として、以後、版を重ねた。中国の鍼灸辞典などに見られる管鍼法は『高等鍼灸学講義』の「鍼治学・灸治学」に基づくと考えられる。